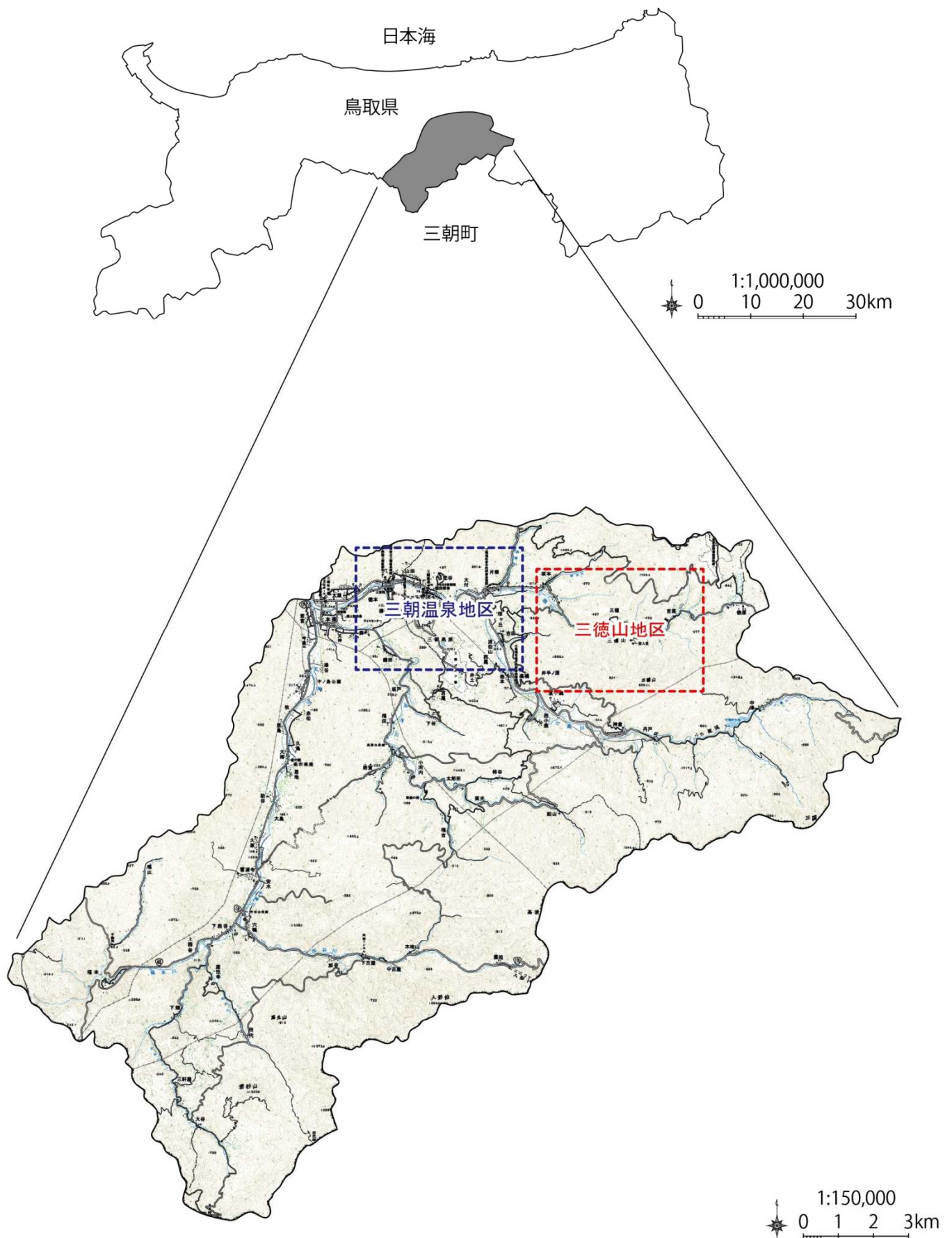
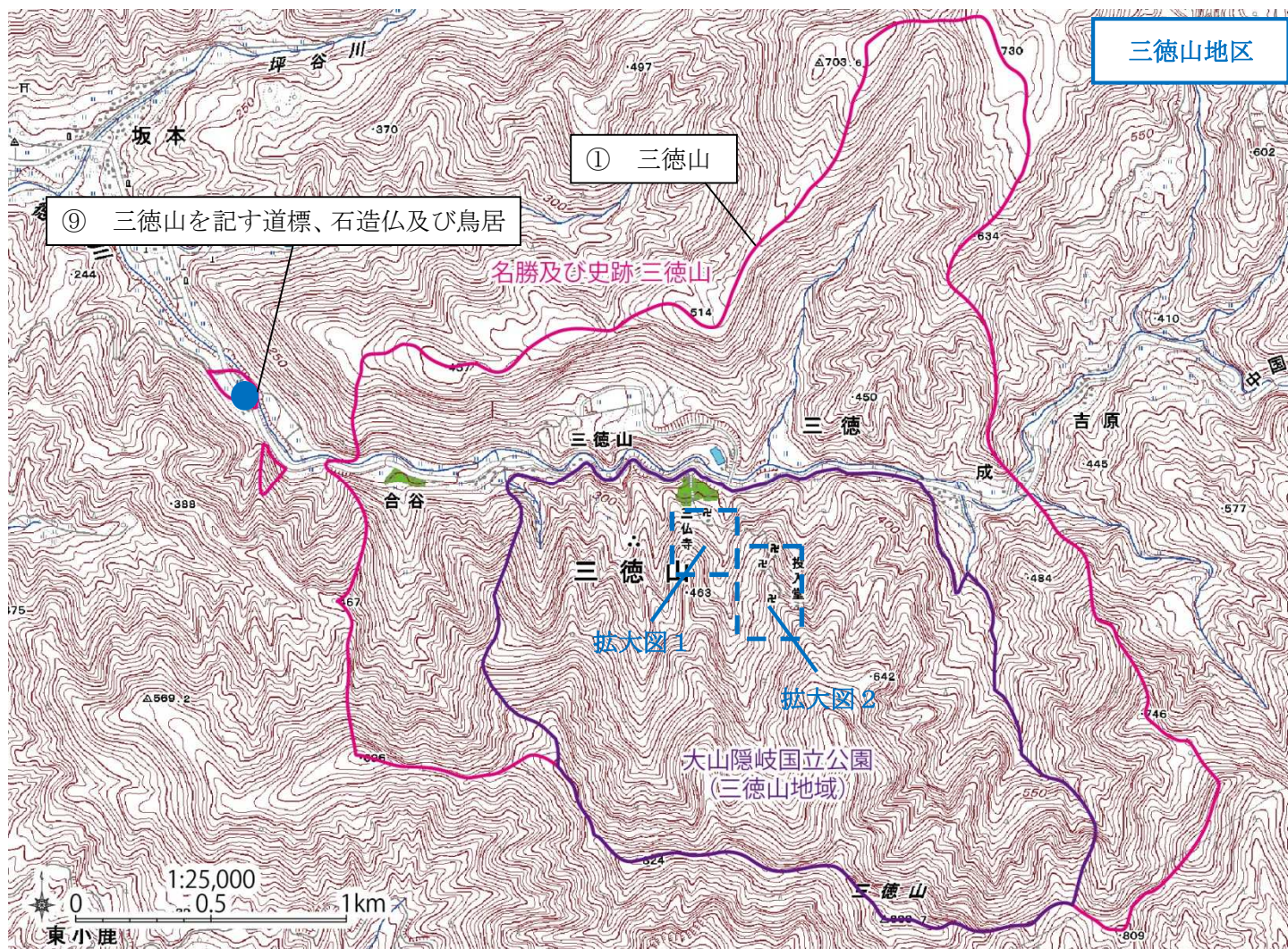


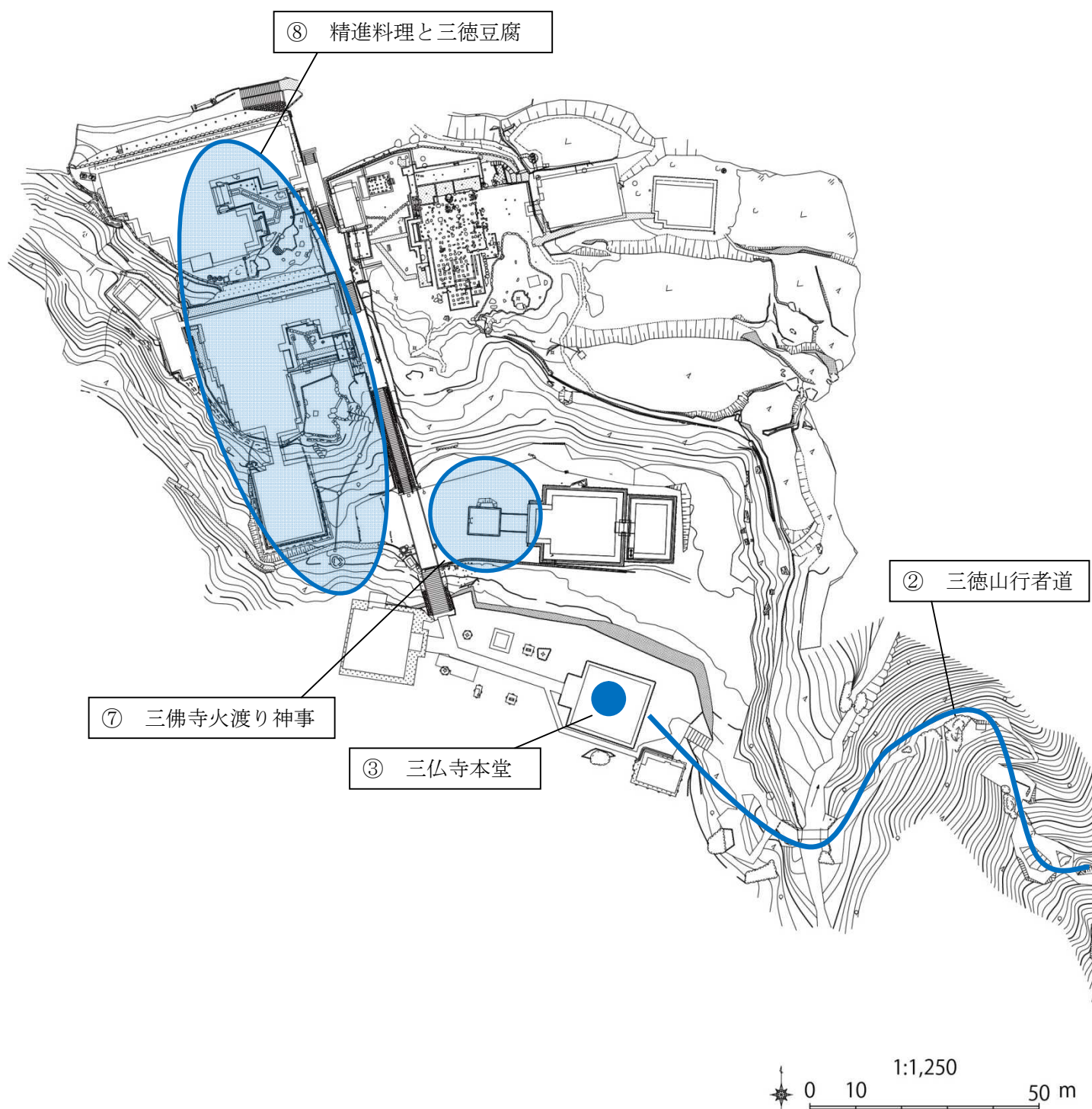
① 申請者	鳥取県 三朝町	② タイプ	地域型 / シリアル型 A B C D E			
③ タイトル						
ろっこんしょうじょう ろっかんち ゆ 六 根 清 浄 と 六 感 治 癒 の 地 ～日本一危ない国宝鑑賞と世界屈指のラドン泉～						
④ ストーリーの概要（200字程度）						
<p>みとくさん 三徳山は、山岳修験の場としての急峻な地形と神仏習合の特異の意匠・構造を持つ建築とが織りなす独特の景観を有しており、その人を寄せ付けぬ ^{おごそ} 厳 かさは1000年にわたって畏怖の念を持って守られ続けている。</p> <p>参拝の前に心身を清める場所として三徳山参詣の『拠点を持った三朝温泉』は、三徳山参詣の折に白狼により示されたとの伝説が残り、温泉発見から900年を経て、なお、三徳山信仰と深くつながっている。</p> <p>今日、三徳山参詣は、断崖絶壁での参拝により「^{ろっこん}六根（目、耳、鼻、舌、身、意）」を清め、湯治により「^{ろっかん}六感（観、聴、香、味、触、心）」を癒すという、ユニークな世界を具現化している。</p>						
⑤ 担当者連絡先						
担当者氏名	三朝町教育委員会社会教育課 主幹 藤井紀好					
電 話	0858-43-3518	FAX	0858-43-0647			
E-mail	n-fujii@town.misasa.tottori.jp					
住 所	〒682-0195 鳥取県東伯郡三朝町大瀬999番地2					

市町村の位置図（地図等）

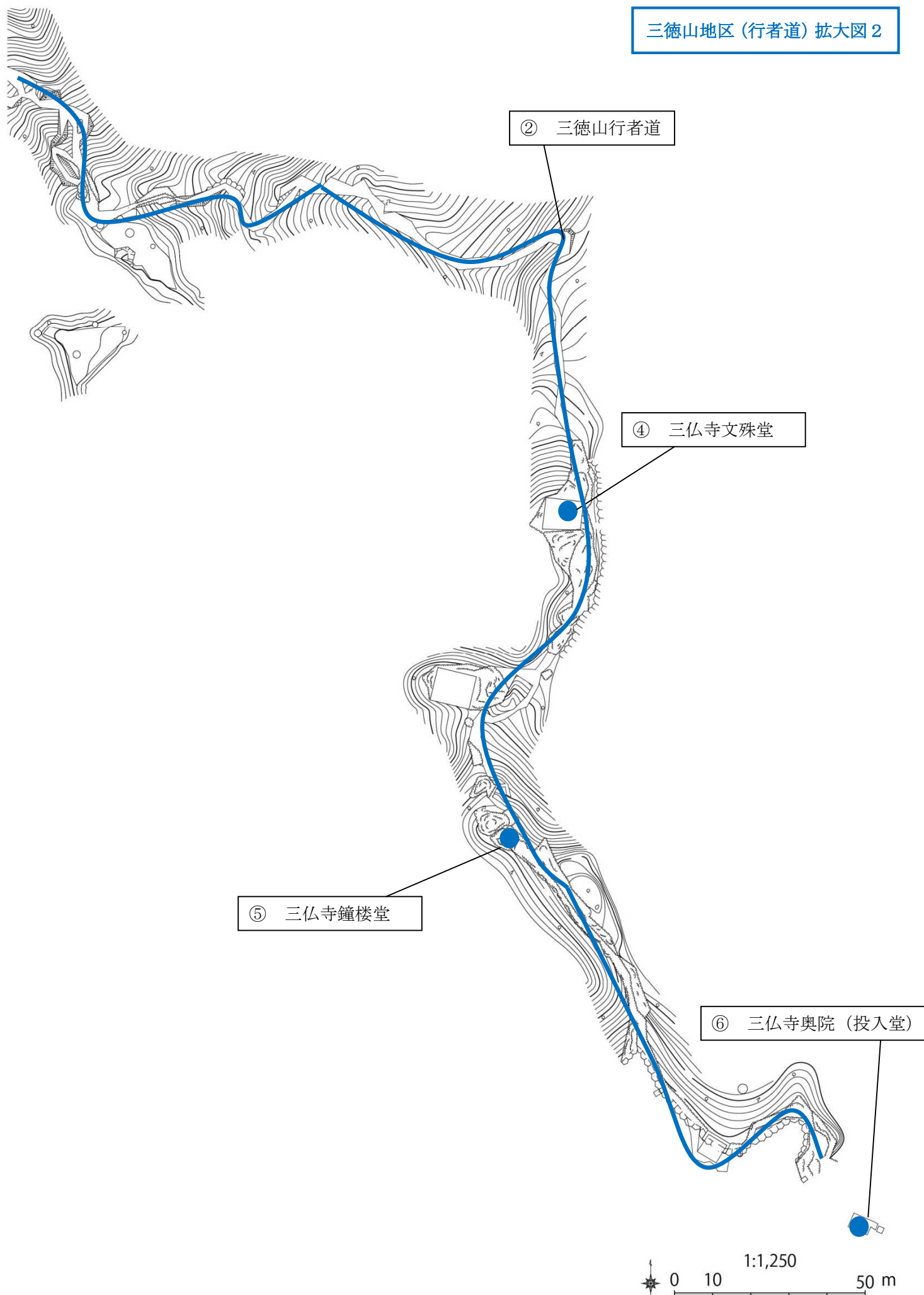




三徳山地区 (行者道) 拡大図 1



三徳山地区 (行者道) 拡大図 2



ストーリー

神話のふるさと因幡国、出雲国と隣り合う伯耆国に修験道の聖地三徳山^{みとくさん}が誕生する。この誕生は、修験道の開祖^{えんのおづぬ}役小角が「神仏のゆかりのあるところへ落としてください。」と三枚の蓮の花びらを空に投げ上げると、そのうちの一枚が伯耆国三徳山^{ほうき}へ舞い降り、この地に修験道の行場が開かれたという、「蓮の花びら伝説」として現在も語り継がれている。その後、三徳山^{じかくだいし}は慈覚大師が山下に堂宇を建立し、「釈迦如来」「阿弥陀如来」・「大日如来」の三尊を安置した三佛寺によって天台密教の道場として隆盛を極めることとなる。

修験道の聖地三徳山への道は、大きく3つに分かれる。東は因幡から、南は美作^{みまさか}から、西の出雲からの道である。それぞれの道程には温泉があり、三徳山と温泉は密接な関係を窺うことができる。とりわけ、出雲からの道は三朝温泉を経由し三徳山に入山する道で、歴史的にも最もよく使われた参詣道である。

三朝温泉に残る「白狼伝説」によると、源義朝の家来大久保左馬之祐^{さまのすけ}が、主家再興の祈願のため三徳山に参る道中、楠の根元で年老いた白い狼を見つけた。「お参りの道中に殺生はいけない」と見逃してやったところ、妙見菩薩が夢枕に立ち、白狼を助けた礼に、「かの根株の下からは湯が湧き出ている。その湯で人々の病苦を救うように」と源泉のありかを告げたという。こうして「万病を癒やす湯」として、「株湯」が現代に伝わる。

しかしある時、株湯に祀られていた神様を誤って湯の中に落としたため、「一たび湯に入れば、大熱を発し、または気絶する者が後を絶たなくなり、悪霊がいる祟りの湯」と恐れられたこともあるが、その悪霊を三徳山にて鎮め、木像の胸中に納めて薬師如来を三朝温泉の守護仏として祀った。その後は「癒やしの湯」として、湯治に来る人々が後を絶たなくなったという。三徳山との強い結びつきを示す話である。

三徳山では目・耳・鼻・舌・身・意を清める「六根清浄」は、まず、三朝温泉の湯に入り、身を清め、癒し、心を整え、山へ向かう準備を行い、翌朝、三徳山へ入る。その道中、随所に地藏菩薩が祀られ、また、辻堂に観音菩薩が祀られ、お参りしつつ三徳山へと向かうことから始まる。

かつての三徳山は北面を北座と呼び、南面を南座と呼んでいた。北座では寺院、僧坊が山内に配され、寺院では仏像、写経、読経、座禅、精進料理などで、己の欲や迷いを断ち切り、心身を清める六根清浄を深めていた。さらに修験道のそれは、深山にわけ入り、洞窟、岩屋で寝食し修行を行っていた。

今日でも、こうした修験道的一端を「行者道」に垣間見ることができる。行者道は「宿^{しゆく}

ストーリー

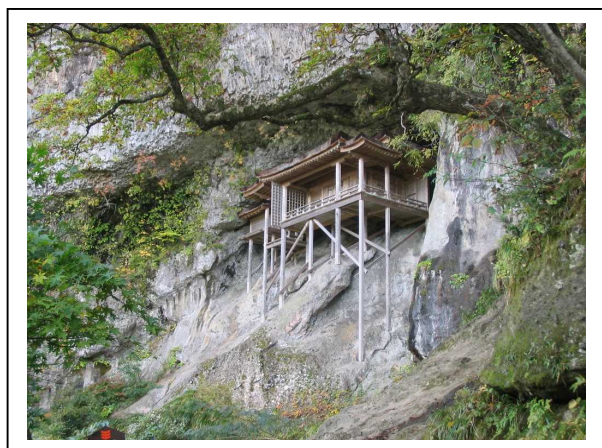
いばし
入橋」から始まり、千数百年変わらぬカズラ坂やブナ林の「願掛けの石段」、「馬の背・牛の背」を這いつくばって登り、「文殊堂」、「地藏堂」など多くの行場を経た後に、突如として眼前に断崖絶壁の岩窟に建つ「国宝投入堂」が現る。

この行者道は、かつての行場を経ることで人と自然界との一体感を強く感じ、自然の力を享受する道として今も残る。

一方、三徳山南座は、現在では地元の人も殆ど訪れない場所であるが、石造物群や行者の墓地とみられる場所など、かつて隆盛を極めた修験道の行場が各所に残っており、三徳山全山が修験道の聖地であったことを物語っている。

先人の行者によって形作られた修験道の聖地において、行を重ね、六根清浄を終えて山を下り、三朝温泉の湯を飲み、浸かり、湯煙に身を置き、再び自然の恵み、自然の力を全身に授かることで、六感を癒す。これをいわゆる、六感治癒と言っている。この「六感治癒」を今に伝える話として、ある人が、目が見えるようになるよう願いを込め、来る日も来る日も行者道に石段を積む行を行い、湯に浸かり身を清めたところ、ある朝、朝日とともに三尊仏が出現し、願がかなえられたという、「願掛けの石段」の物語がある。また、三徳山周辺から切り出した大藤カヅラで行う「三朝の大綱引きジンショ」や、清流三徳川でのカジカの鳴き声や川湯から立ち登る湯煙など、心を癒やす情景の中で六感治癒を果たすことができる。

このように三徳山で「六根」を清め、三朝温泉で「六感」を癒す一連の作法は「人と自然が融合する日本独自の自然観」を特徴的に示したものであり、心と体を洗うことで、誰もが持つ清らかさが蘇る地として、ありつづけている。



国宝 投入堂



三朝温泉

ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
①	みとくさん 三徳山	国名勝及び 史跡	「六根清浄」のストーリーの核となる空間。 山岳修験の霊場であり、急峻な地形と独特の意匠及び構造を持つ建築とが織りなす独特の景観を有する。	
②	みとくさんぎょうじゃどう 三徳山 行者道	国名勝及び 史跡地内	「目・耳・鼻・舌・身・意＝(六根)」の感覚全てを研ぎ澄まし、命を懸けて山中に鎮座する「国宝投入堂」を目指す 「六根清浄」の全てを清める修行の道。	
③	さんぶつじ 三仏寺本堂	県有形 (建造物)	行者道の起点にあたり、「六根清浄」の「鼻」にあたる。 出発前に備える線香と修験道では、「神木」とされる石楠花の芳香に包まれ、国宝投入堂への参拝が始まる。	
④	三仏寺文殊堂	国重文有形 (建造物)	「六根清浄」の「身」を代表する場所 で、行者道の難所「クサリ坂」にあたる行場。登坂後に文殊堂から望む日本海、大山の雄々しき姿は参拝者の心を徐々に清らかにする。	
⑤	さんぶつしょうろうどう 三仏寺 鐘楼堂	県有形 (建造物)	「六根清浄」の「耳」を代表する、行者道中に点在する堂宇の一つ。 造立方法は謎だが、投入堂参拝前の儀式として参拝者は鐘を撞き、心を落ち着かせる場所として欠かせない。	
⑥	さんぶつおくのいん 三仏寺 奥院 (なげいれどう (投入堂))	国宝 (建造物)	「六根清浄」の「目」の核となる建造物。 建築方法は今も謎の断崖絶壁に建つ三徳山の象徴。信仰の象徴である蔵王権現像を配し、 「六根清浄」が満願成就する最終到達地。	
⑦	三徳山火渡り神事	未指定 (民俗)	「六根清浄」の「意」にあたる、三仏寺の秋季法要。 国宝投入堂参拝が叶わぬ者でも、火の上を素足で歩くことで祈りが届くとされている。	
⑧	精進料理と三徳豆腐	未指定 (風習)	「六根清浄」の「舌」を代表するもの。 山内で供される料理を食することで、参拝前に体の中を清らかにし参拝の始まりを予感させる。	

番号	文化財の名称 (※1)		指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
⑨	みささ 三朝温泉		未指定	三徳山参詣の折に白狼によって示された以降、 三徳山参詣の拠点地 として参拝者の心身を清め、「観・聴・香・味・触・心＝六感治癒」のストーリーの核となる空間。	
	三徳山参詣道沿いの石造物		未指定	三徳山と温泉のストーリーを結合させるもの。 三徳山への参詣道沿いにかつて道標・石仏・鳥居等住民が設置。地元の三徳山への信仰を裏付ける存在。	
	株湯		町旧跡	「六感治癒」の「味」「香」を代表する三朝温泉発祥の地。 株湯と同じく温泉街にある「河原風呂」は、三朝温泉の象徴であり、温泉から発する「湯の香」は三朝温泉から始まる三徳山参詣を予感させる。また「飲泉」は、体の中を清らかにすると言われ、医療効果としても利用されている。	
	三朝のジンショ		国重要無形 (民俗)	「六感治癒」の「観」にあたり、 三朝温泉を代表とする民俗行事で、霊場である三徳山周辺から切り出した藤カズラを使い、東西に分かれて引き合う勇壮な綱引き。藤カズラを用いる形態は特異で、人と自然が融合した独特なもの。	
	さいとりさし		県無形 (民俗)	「六感治癒」の「聴」「触」にあたる、 三朝温泉に伝わる座敷芸。三徳山を舞台にした狂言風の踊りで三徳山との関係が民衆に浸透していたことを示す。	
	きや 木屋旅館		国登録有形 (建造物)	「六感治癒」の「触」「心」を代表する 木造3階建ての旅館。大正期の温泉施設の原型を有しており、入浴以外の温泉利用として「オンドル」施設が残る、昭和の温泉文化を代表する建物。	
	木造薬師如来坐像		未指定	三徳山と温泉のストーリーを結合させるもの。 三朝温泉街「薬師堂」の安置仏。「湯薬師さん」と呼ばれ、 温泉街(参詣の起点)において三徳山を象徴する仏像。 かつて三徳山から移された歴史をもつ。	

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
⑨	みささばし 三朝橋	国登録有形 (建造物)	「六感治癒」の「聴」「心」にあたる。 木橋を意識した昭和初期のコンクリート橋で、「河原風呂」とともに三朝温泉の象徴である。三朝川のせせらぎとカジカガエルの鳴き声は、参拝者の心を癒す。	
	りょかんおおはし 旅館大橋	国登録有形 (建造物)	「六感治癒」の「観」「心」を代表する 木造3階建の旅館。眺望が楽しめるよう客室すべてが、三朝川沿いに配され、部屋ごとに床の間、天井、欄間等の意匠が異なる数寄屋風の造りで、昭和初期の建築技術の高さをみせる大規模な木造和風旅館。	
	なんえんじ 南苑寺	国登録有形 (建造物)	「六感治癒」の「観」「心」にあたる 三朝温泉の寺院。三朝温泉街の高台に配された本堂での座禅は、心を徐々に清らかにするとともに、竜宮城を思わせるユニークな伽藍景観を形成する山門や、見る角度によりその表情を変える鬼瓦は、参拝者の目を楽しませる。	

- (※1) 文化財の名称には適宜振り仮名を付けること。
(※2) 指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること(例：国史跡、国重文(工芸品)、県史跡、県有形、市無形等)。
(※3) 各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること(単に文化財の説明にならないように注意すること)。
(※4) ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること(複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること)。

構成文化財の写真一覧

① 三徳山



④ 三仏寺文殊堂



② 三徳山行者道 (クサリ坂)



⑤ 三仏寺鐘楼堂



③ 三仏寺本堂



⑥ 三仏寺奥院 (投入堂)



構成文化財の写真一覧

⑦ 三徳山火渡り神事




⑨ 三徳山参詣道沿いの道標 (石造物)



⑧ 精進料理と三徳豆腐



⑨ 株湯



⑨ 三朝温泉



⑨ 三朝のジンショ



構成文化財の写真一覧

⑨ さいとりさし



⑨ 三朝橋



⑨ 木屋旅館



⑨ 旅館大橋



⑨ 木造薬師如来坐像



⑨ 南苑寺

